

多賀町文化財自然誌報告書 第5集

多賀の昆虫・鱗翅目

— 蝶亜目 (チョウ) —

1998・3

多賀町教育委員会

序

多賀町教育委員会では毎年、文化財・自然調査を実施してきました。美術工芸品、地学、植物、昆虫の分野で、各調査員の方々を中心に成果をまとめてきました。本報告書は、昆虫（チョウ）の調査成果をまとめたものです。

多賀町の豊かな自然を改めて認識させられる貴重な成果を得ることができたと自負しております。本報告書が本町の発展につながるものになれば幸いです。

最後になりましたが、本調査に多大のご協力をいただいた町民の方々、また、調査及び報告書を作成していただいた布藤美之先生にたいして合わせてお礼申し上げます。

多賀町教育委員会

教育長 平 木 和 男

例 言

1. 本報告書は、平成4年度から実施してきた昆虫（チョウ）調査の成果をまとめたものである。
2. 本調査は、多賀町教育委員会と文化財・自然誌調査員（昆虫担当）の布藤美之で実施した。
3. 執筆は布藤美之が行った。
4. 本書のとりまとめ、編集は多賀町教育委員会で行い布藤美之が担当した。
5. 写真撮影は、大八木和久（多賀町教育委員会資料調査員）が行った。

目 次

序

例言・目次

はじめに

- | | |
|-------------------------|----|
| 1. 多賀町の蝶数題..... | 3 |
| 2. 多賀町の蝶類目録と成虫の時期 | 23 |
| 3. 調査結果をまとめて思う | 27 |

あとがき

『多賀町文化財自然誌報告書 第5集』 正誤表

頁	行	(誤)	(正)
P3	4	安原	山女原
P3	15	翌年3月下旬か4月上旬	翌年3月下旬から4月上旬
P4	6	れ付近	れて付近
P4	12	<i>eversmani</i>	<i>eversmanni</i>
P5	15	なっている。	なっている。
P6	15	<i>Chrysozhyrus</i>	<i>Chrysozephyrus</i>
P6	25	<i>Thermozephyras</i>	<i>Thermozephyrus</i>
P8	5	ウラゴマタラシジミ	ウラゴマダラシジミ
P12	8	表れず	現れず
P13	6	見えます。	見える。
P13	8	あります。	ある。
P23表	17	スジボソヤマキチヨウ	スジボソヤマキチョウ
P25表	14	極致的	局地的
P26	8	返って	帰って
P27	4	多賀町博物館建設準備	多賀町教育委員会・臨時調査員
P28	6	草原生	草原性
P29	6	ギフチヨウか何処	ギフチヨウが何処

はじめに

多賀町には、鈴鹿山地を源流とする芹川・犬上川があり、両川に挟まれた平地・丘陵地や流域に人家が集まって集落をつくっている。

芹川は安原で権現谷・大洞谷方向に、犬上川は川相で犬上（北谷）川・犬上（南谷）川に分かれ、更に途中や上流で大小の谷に分岐し、鈴鹿山地に深く入りこんでいる。

低山地・山地が広く緑が多く、池沼もあり、谷も深く多い。自然に恵まれた生物の宝庫と考えている。

1997年末現在、筆者自身の調査が最も進んでいるチョウについて報告することにした。

1. 多賀町の蝶数題

(1) 「春の女神」 ギフチョウ *Luehdorfia japonica*

桜の開花と合わせるかのように3月下旬から4月始めに姿を見せる種で、発生時にはテレビや新聞にも必ず何度か登場し、その美しさから“春の女神”と呼ばれ親しまれている。



4月中旬頃から、食草カンアオイの葉裏に緑色で光沢のある美しい卵を菱形や北斗七星のような形にきれいに並べて産卵し、5月下旬には姿を消す。

孵化した幼虫は、カンアオイを食べて6月には蛹になり、翌年3月下旬か4月上旬に羽化するまで長い期間を蛹で過ごす。

ギフチョウの仲間は、現在世界で4種類あり、オナギギフチョウ *Luehdorfia longicaudata*・シナギフチョウ *Luehdorfia chinensis* が中国にヒメギフチョウ *Luehdorfia puziloi* がロシア・韓国・日本の北海道・本州の中部地方以北にギフチョウ *Luehdorfia japonica* は日本の秋田県を北限とする本州だけに分布している。

ギフチョウは、日本の絶滅のおそれのある野生生物（レッド・データ・ブック）の危急種として1991年8月に指定され、各地で保護活動がされているが、種だけに目を向け、食草・訪花植物・生活環境を忘れた保護も多く、開発で棲息地が破壊されギフチョウが減少・絶滅している場所もある。

多賀町にはギフチョウの棲息地が多くあり水谷・杉・八重練・大岡・四手・多賀・富之尾・藤瀬・川相・小原・霜ヶ原から棲息を確認している。が開発、杉が育って林が暗くなり光りを遮り風通しも悪くなる等により減少の道をたどる棲息地もある。

(2)「春の妖精」ウスバシロチョウ *Parnassius glacialis*

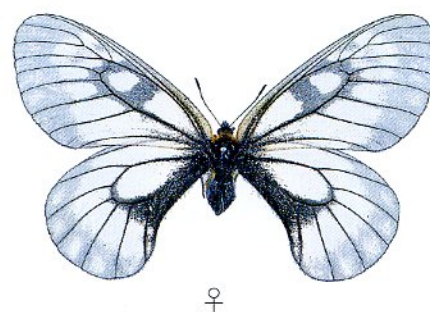
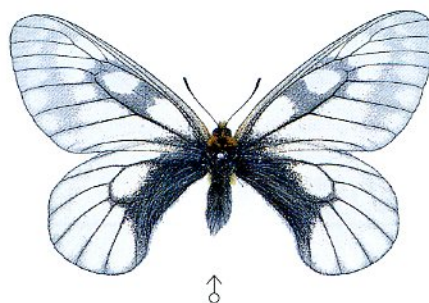
5月上中旬に姿を見せる種で、ふわりふわりと優雅に飛ぶ姿は妖精を想像させてくれる。5月下旬から6月に食草ムラサキケマンの根際やその付近の地表にある枯枝、枯葉に産卵し、6月下旬には姿を消す。

卵で越冬し、早春（雪解けの頃）に孵化した幼虫は摂食時以外は食草ムラサキケマンを離れ付近に潜んでいる。4月中下旬ころ蛹化する。

ウスバシロチョウの仲間は高山にしか棲息しない珍種も多く、世界の研究家が憧れ、蒐集家も多い。日本ではウスバキチョウ *Parnassius eversmani*が北海道の大雪山・十勝岳の高山地帯にヒメウスバシロチョウ *Parnassius stubbendorffii*が北海道にウスバシロチョウ *Parnassius glacialis*は北海道の比較的温暖な地域・本州・四国に分布している。

多賀町では、大君ヶ畑・霊山の山地帯の畑周辺に多く、畑に植えられたネギの花に止まっている時は手で採集することも可能である。今後、食草ムラサキケマンの自生している山地帯から分布地が、まだまだ発見できると思う。

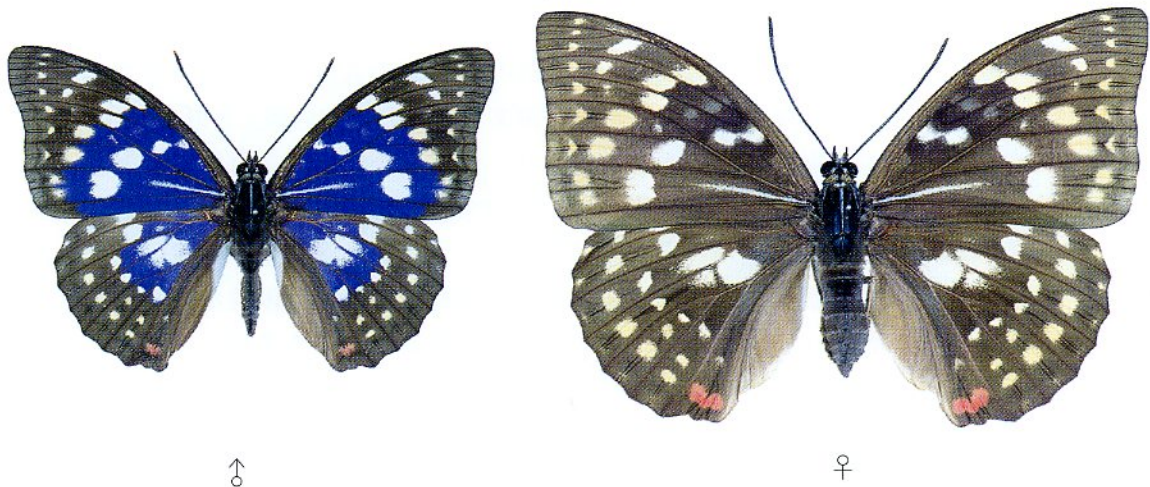
地方変異、個体変異の大きい種で、一般的には日本海側のものは黒っぽい太平洋側のものは白っぽいと云われる。滋賀県産は黒っぽい方に入るが、余呉町のものは特に黒く翅全体が真っ黒でウスバシロチョウと呼びたくなる個体も見られる。多賀町はそこまで黒くはないが、全国的に見れば黒い方に属する。個体変異も大きいので、多くの個体を集め変異を調べるのも面白い。



(3)「日本の国蝶」オオムラサキ *Sasakia charonda*

桜が国花であるように、国蝶に指定されている。日本産のタテハチョウ科の中では最も大きく、頭上高くを飛ぶ姿は実に雄大である。早は特に大きく近くを飛ぶ時はバタバタという羽音に驚かされ思わず首をすくめる事もある。

7月上・中旬に姿を見せる種で7・8月に夏の太陽をいっぱいを受け、林縁の高所を飛ぶ。クヌギ等の樹液に飛来することが多いが、時には路上の水溜まりへ吸水に来る時もある。羽化した成虫は7月中・下旬から8月上旬には食樹エノキの小枝上に数卵～数十卵（多い場合は100以上の場合もある）を並べて産卵する。産卵された卵は7月下旬から8月上旬には孵化し1令幼虫となり葉上に静止しその葉を食べるが、成長すると静止している葉は食べず、移動して付近の葉を食べもとの葉に帰り静止をする。10月頃には3令または4令になり緑色の幼虫が褐色の越冬幼虫となり、樹を下りて食樹の根元付近の落葉の裏面に静止して越冬する。翌春エノキの芽が出る頃、越冬から目ざめた幼虫は樹上に上り、エノキの葉を食べはじめると脱皮して緑色の幼虫になり、6月中旬には蛹になる。



オオムラサキは、台湾・中国・韓国・日本に分布しているが、台湾では現在採集禁止種になつてゐる。日本では、北海道（夕張・札幌付近が北限）・本州・四国・九州に分布し、北海道産は小さく、裏面は黄色っぽい。本州産の裏面の色は、北ほど黄色っぽく西へ行くほど白くなる。多賀町からは木曽・一円・栗栖・桃原・霊山・樋田・富之尾・大君ヶ畑から確認され、樋田・富之尾では越冬幼虫も確認している。多賀町産は裏面の白っぽい個体が多いが黄色の強い個体も見られる。四国・九州産は裏面の白い個体が殆どで裏面の斑紋の回りが黒くふちどられ韓国亜種に似てくる。

(4)「空とぶ宝石」Zephyrusの仲間

シジミチョウ科の中には、羽化後、金緑色や青緑色の羽を朝・夕の太陽にきらきらと光らせて飛び、谷にのびた枝や日当たりの良い空間にある枝の葉先に羽を開いて休み他の♂が飛来すると飛び出し卍巴に舞い上がり、追い出すと元の葉上に戻ってくる蝶の姿が宝石が飛び回っているように見えるグループがある。その仲間は「Zephyrus (そよ風)」と呼ばれ、ブナ・ミズナラ・クヌギ・アカガシなどブナ科植物を食樹とし山地性で珍しい種も多く研究者の憧れのまとである。

Zephyrusの仲間は、台湾・中国・インド・韓国・日本に多く分布しているが珍種が多く蒐集するのは難しい。現在、日本には25種が分布し、滋賀県からは20種が記録されている。その内、多賀町では14種が発見されているが今後の調査でウスイロオナガシジミ・ウラナミアカシジミも発見出来る可能性がある。しかし、杉の植林や開発によりミズナラ・コナラ・クヌギ・アベマチ・アカガシ等の雑木林が減少している昨今、食樹・生活圏の減少により絶滅に向かって進んでいる点が心配である。特に平地性のZephyrusにこの傾向は強いが、植林が高所に進んでいる現在、山地性のZephyrusにも影響を与えている。

① ヒサマツミドリシジミ *Chrysozephyrus hisamatsusanus*

1969年に最初の1♂が飼育羽化し、1970年冬に真の食樹ウラジロガシが発見されるまでは、採集した人は運の良い人だと皆に羨ましがられ「幻の蝶」と呼ばれていた。当時、京都の杉峠・滋賀県の比良山地（武奈ヶ岳）は有名な産地で7月になると全国から多くの研究家が集まり、それでも採集出来た人は余程運の良い人だけだった。食樹が発見された後は九州・四国・本州（富山県南部以南）から産地が見つかり採卵による飼育が盛んになり幻の字は消えたが、今も成虫を野外で採集するのは困難な珍品である。多賀町では、霊山（落合・入谷）・河内・大君ヶ畑・萱原から分布を確認しているが余り多くない。特に近年は杉の植樹が盛んでカシ類が減少しているのは心配である。

長い間、日本特産種とされていたが、台湾に別亜種が分布している。

② キリシマミドリシジミ *Thermozephyrus ataxus*

前種と共に南方系の種で九州・四国・本州（神奈川県以西）に分布し、三重県では天然記念物に指定されている珍品である。多賀町では霊山（落合・入谷）・河内・甲頭倉・保月・五僧・大君ヶ畑・萱原から分布を確認している。アカガシを食樹としている為、今後が心配な種である。インド・中国・台湾・韓国に分布している。

③ アイノミドリシジミ *Chrysozephyrus brilliantinus*

北海道・本州・四国・九州に分布する金緑色が最も強いZephyrusである。日光を受けてきらきらと光り飛び回る姿は、神秘の世界に迷い込んだ感じもする。山地性の珍品で、早朝の日光が当たりはじめると活発に飛び出し、午前中で姿を消してしまう。多賀町では霊山（落合）・河内・大君ヶ畑・萱原で分布を確認している。ミズナラ・コナラを食樹としている為、今後が心配な種である。韓国・中国・ロシアに分布している。

④ ミドリシジミ *Neozephyrus japonicus*

北海道・本州・四国・九州に分布し、四国・九州では山地性の傾向があるが北海道・本州では低地から山地にかけて広く分布する。多賀町では久徳の野鳥の森付近・富之尾で確認しただけだが、産地では夕刻、食樹のまわりを数多く飛び回る姿も見られる。食樹ハンノキは湿地や田の周辺・山麓に多く、ヤマハンノキは山地で見られ、今後多くの分布地が見つかると思う。ロシア・中国・韓国に分布している。

⑤ エゾミドリシジミ *Favonius jezoensis*

北海道・本州・四国・九州に分布する日本特産種である。本州中部地方以西では山地性の傾向があり、翅表が青緑色に光るZephyrusである。午前10時頃から飛びはじめ、午後になると活発になり夕方が最盛となる。多賀町では霊山(落合・入谷)・河内・保月・五僧・大君ヶ畑・萱原から確認している。食樹はミズナラだがコナラ・ウラジロガシに産卵することもある。

⑥ オオミドリシジミ *Favonius orientalis*

北海道・本州・四国・九州の低地から山地に分布する青緑色のZephyrusである。多賀町では、霊山・河内・向之倉・桃原・後谷・水谷・栗栖・一円・木曽・敏満寺・大君ヶ畑・萱原から確認しているが、今後の調査で産地は未だ見つかると思う。国外ではロシア・中国・韓国に分布している。

⑦ フジミドリシジミ *Sibatanozephyrus fujisanus*

北海道・本州・四国・九州に分布し、山地性の青緑色の珍品である。日本特産種だが近年、台湾・中国からよく似た別種が発見された。多賀町では、霊山・大君ヶ畑から確認している。食樹はブナ・イヌブナだが、ブナは高所にしかなく海拔500m以上に見られるイヌブナは伐採が進んでいる為、非常に心配な種のひとつである。

⑧ ウラキンシジミ *Coreana stygiana*

北海道・本州・四国・九州の山地性の種だが、近畿地方では平地にも産地があり、琵琶湖周辺でも低地からも発見されている。多賀町では大君ヶ畑・富之尾から確認されているだけだが、今後まだ産地は出てくると思う。食草はトネリコ・コバノトネリコで日本特産種である。

⑨ アカシジミ *Japonica lutea*

北海道・本州・四国・九州の平地から山地に広く分布する。昼間はクリの花などで吸蜜するが、おもに夕方活動する。多賀町では久徳・霊山・多賀・河内・大君ヶ畑・萱原から確認されているが、今後まだ産地は出てくると思う。クヌギ・アベマキ・コナラ・ミズナラを食樹としている為、里山の変化が進む今日、心配な種である。ロシア・中国・台湾・韓国に分布している。近年、カシワを食樹とし、非常によく似たキタアカシジミが本種から独立し、北海道・本州の東北地方・中国地方・韓国などに分布している。

⑩ ウラクロシジミ *Inatsume orsedice*

北海道・本州・四国・九州の山地に多いが滋賀県では低地から山地にかけて分布している。多賀町では一円・多賀・敏満寺・大君ヶ畑・萱原・四手・富之尾から確認されている。食草はマンサクで、日本のほか台湾に分布している。

⑪ ウラゴマタラシジミ *Artopoetes pryeri*

北海道・本州・四国・九州の山地・平地に広く分布している。多賀町でも各地から記録されている。食樹はイボタで、ロシア・中国・韓国にも分布している。

⑫ ウラミスジシジミ *Wagimo signatus*

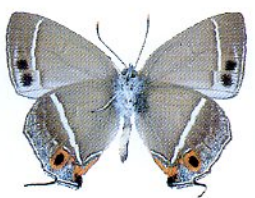
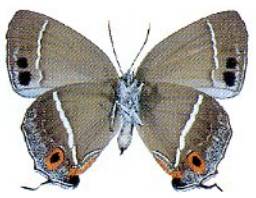
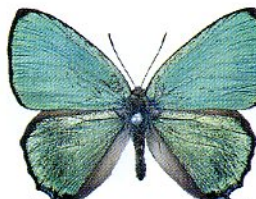
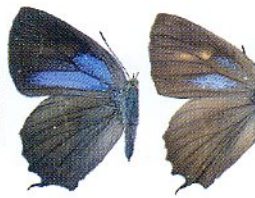
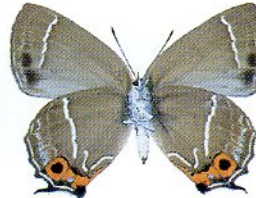
北海道・本州・九州に分布している。多賀町では大君ヶ畑で1卵を採卵し幼虫まで飼育したのが唯一の記録である。食樹はミズナラ・コナラ・クヌギで、ロシア・中国・台湾・韓国にも分布している。

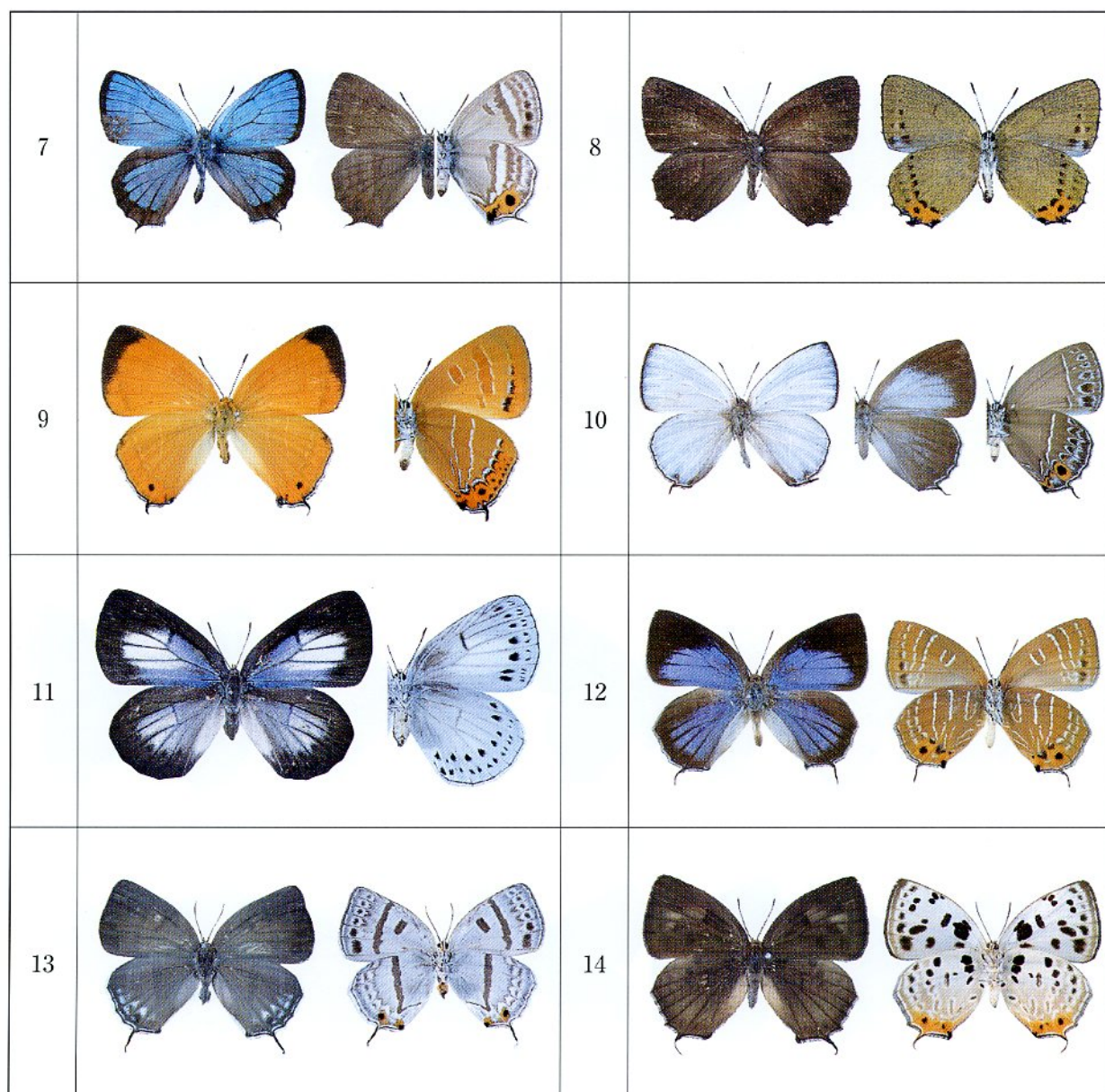
⑬ ミズイロオナガシジミ *Antigius attilia*

北海道・本州・四国・九州に分布し、平地から山地に広く分布している。多賀町でも各地に産地があり、最も普通に見られるZephyrusである。食樹はクヌギ・アベマキ、ミズナラで、里山の変化で激減が心配される種のひとつである。日本のほか ロシア・中国・台湾・韓国にも分布している。

⑭ オナガシジミ *Araragi enthea*

北海道・本州・四国・九州に分布し、滋賀県では伊吹山地の奥地に産地が多い。多賀町では河内（権現谷）で2卵が採卵飼育され、羽化を見ているだけである。食樹はオニグルミ・ヒメグルミで、ロシア・中国・台湾・韓国にも分布している。

1	   
2	   
3	   
4	   
5	   
6	   



1. ヒサマツミドリシジミ ♂・♀・♂裏面・♀裏面
2. キリシマミドリシジミ ♂・♀・♂裏面・♀裏面
3. アイノミドリシジミ ♂・♀A型・♀AB型・♀裏面
4. ミドリシジミ ♂・♀O型・♀A型・♀B型・♀AB型・♀裏面
5. エゾミドリシジミ ♂・♀・♂裏面・♀裏面
6. オオミドリシジミ ♂・♀・♂裏面・♀裏面
7. フジミドリシジミ ♂・♀・♀裏面
8. ウラキンシジミ ♀・♀裏面
9. アカシジミ ♀・♀裏面
10. ウラクロシジミ ♂・♀・♀裏面
11. ウラゴマダラシジミ ♀・♀裏面
12. ウラミスジシジミ ♂・♂裏面
13. ミズイロオナガシジミ ♀・♂裏面
14. オナガシジミ ♀・♀裏面

(5) 北上を続ける蝶

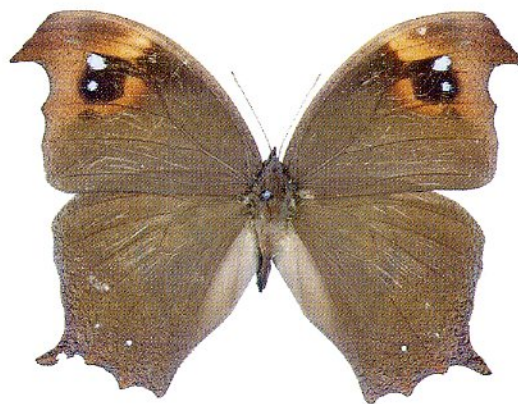
地球温暖化の影響か、生活圏の拡大か、以前は分布しなかった筈が北上し、何時の間にか住みついてしまった種がある。多賀町でも近年普通にみられるようになったり、イシガケチョウのように未だ確認はされてはいないが、霊仙山の坂田郡側では昨年も今年も確認され、多賀町で記録されるのも時間の問題と考えられる種もある。

① ツマグロヒョウモン *Argyreus hyperbius*

本州・四国・九州・南西諸島に分布する南方系の蝶で、年々北上を続けている。滋賀県では、記録的に採集される珍種だったが、1980年代後半になると大津市付近では採集に出れば見られるようになり、1991年には彦根市でも普通に見られ、栽培種のパンジーでも発生し庭を成虫が飛び回る程になった。1995・1996年春の寒波の影響か大発生 of 峠を過ぎたのか、一時程（大発生当時はヒョウモンチョウの仲間では最も多い種だった。）多くはないが、各地で発生し、良く見られる種である。食草は各種スミレ類である。国外ではアフリカ北東部からパキスタン・インド・ヒマラヤ・ビルマ・中国・台湾・韓国・インドシナ・マレー半島をへてフィリピン・スマトラ・ジャワ・バリまでの広い範囲に分布している。

② クロコノマチョウ *Melanitis phedima*

本州・四国・九州に分布する蝶で、以前は迷蝶が飛来し、たまたまジュズダマに産卵されて一時発生するのが見られる程度だったが、近年大津市では普通にみられるようになってきた。まだ湖東地方では多いとは云えないが、伊吹町・長浜市・坂田郡でも採集され彦根市では幼虫・成虫ともに記録されている。多賀町では1984年9月30日に大君ヶ畑で1♀の記録があるだけだが、最近の採集記録から見ても多賀町でも少ないながらも発生を続けていると考えられる。食草はススキ・ジュズダマが多い。国外ではインド・セイロン・ブータン・中国・台湾・マレー半島・セレベスなど広範囲に分布している。



(6) 季節によって化ける蝶

春と夏・夏と秋など発生する季節によって、同じ種でありながら大きさ・形・色・模様を変え、変化の大きい蝶の中には別の種のように見える場合もある。これを蝶の「季節型」と呼んでいる。

① アゲハチョウ (*Papilio*) の仲間

アゲハチョウ科の*Papilio*と呼ばれるグループの多くは、5・6月に発生する春型と7・8月に発生する夏型で極端に大きさを変える。中でもミヤマカラスアゲハ (*Papilio maackii*) の夏型は後翅裏面の黄色帯が表れず、カラスアゲハと間違えやすい個体もいる。

② モンシロチョウ (*Artogeia rapae*) ・スジグロシロチョウ (*Artogeia melete*)

春型は白っぽく、夏型は黒紋・黒帯ともに大きく黒っぽくなる。春型の♂は黒紋の現れない個体もある。

③ ツマグロキチョウ (*Eurema laeta*)

6・7月に発生する夏型は、前翅端が丸味をもち黄色っぽくキチョウと間違えられることもある。9・10月に発生する秋型は、濃黄色になり、前翅端は著しくとがり後翅裏面に褐色の横帯がはっきりと現れる。近年、減少している種で、食草カワラケツメイと共に守りたい種である。

④ トラフシジミ (*Rapala arata*)

4・5月に発生する春型は、表面は明るい青紫色で、裏面は白色斑と褐色斑の境が鮮明で美しい。夏型は、表面の青紫色はくすみ、裏面の両斑の色差が少なく全面が茶褐色になり、季節差が明瞭に現れる。

⑤ ベニシジミ (*Lycena phlaeas*)

季節差がはっきりと色彩に現れる種で、短日低温期に発生する個体は赤色地が広がり、光沢もあり美しい。夏季に発生する個体は黒色部が広がり黒っぽくなる。

⑥ サカハチチョウ (*Araschnia burejana*)

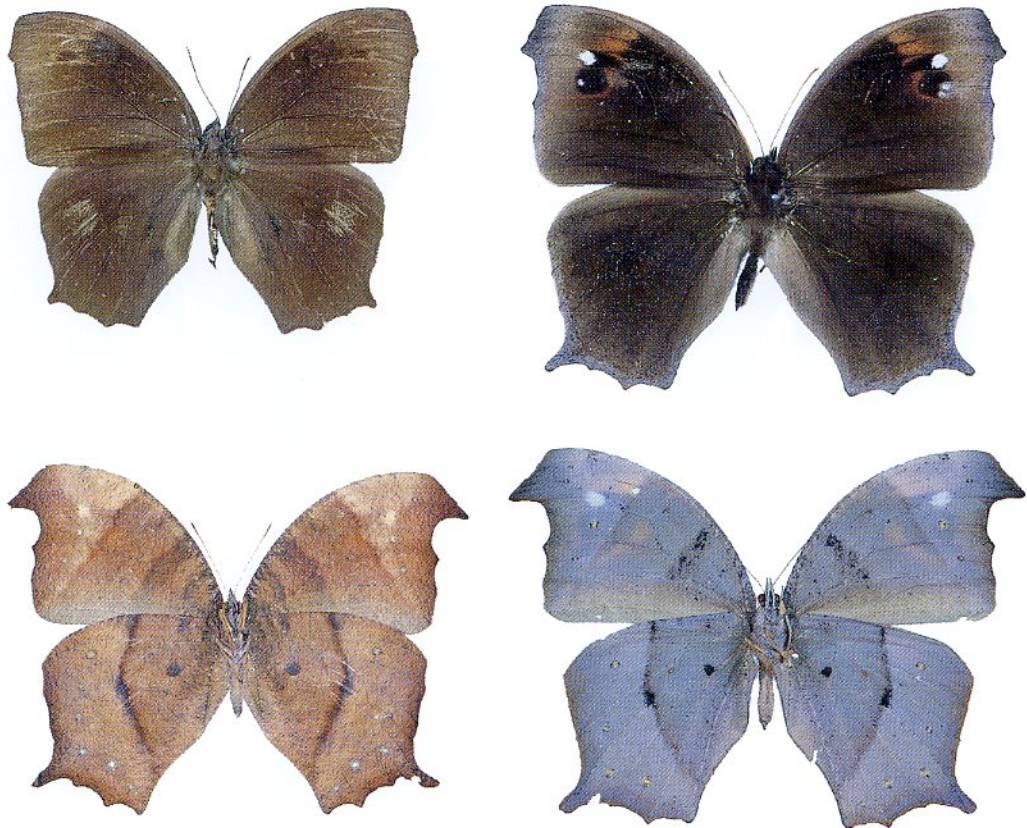
4・5月に発生する春型は橙赤色部があざやかで、前後翅にまたがる逆さの8（八の字を逆さにしたように見えることからサカハチチョウと呼ばれる）の帯も橙黄色になる。7・8月に発生する夏型は、黒っぽい茶褐色の地に逆さの8が白色帯になる。裏面は余り差は見られないが、夏型の方がやや黒っぽい。季節差が顕著で表面だけ見ていると別種のように見える。

⑦ キタテハ (*Polygonia c-aureum*)

6・7月に発生する夏型は、表裏ともに黄褐色で表面の黒色斑は発達している。9・10月に発生する秋型は、表裏ともに茶褐色でやや赤みが強く、表面の黒色斑は小さい。外縁の切れ込みは夏型より深く、前翅の尖り方は鋭い。成虫で越冬する。

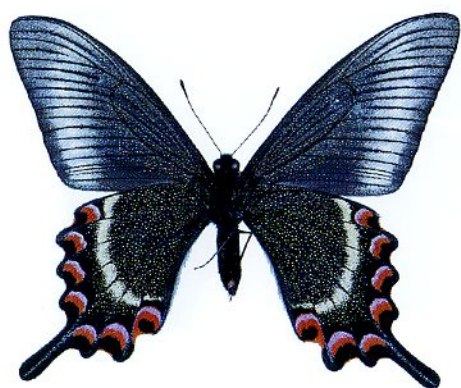
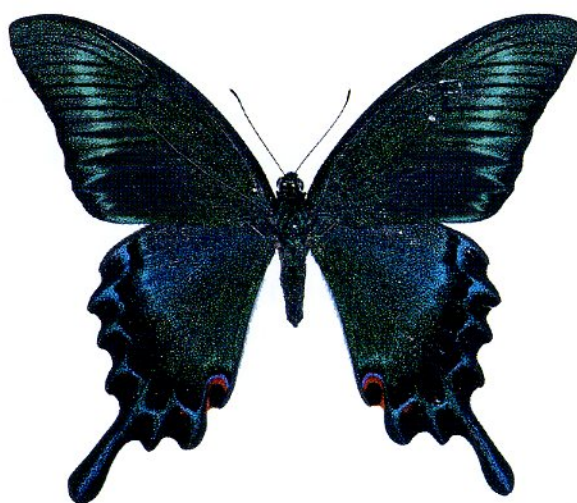
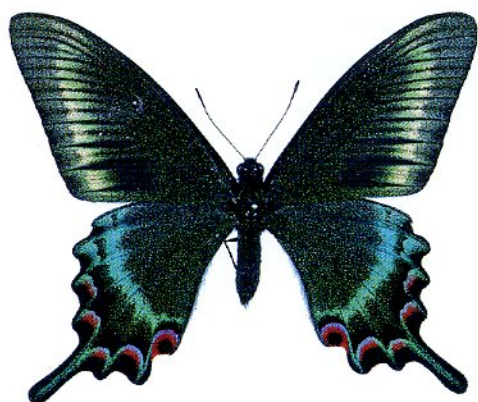
⑧ クロコノマチョウ (*Melanitis phedima*)

6・7月に発生する夏型の♂は特に前翅端の突出が少なく、翅が丸く見えます。♀の前翅は突出しているが弱い。裏面は不明瞭だが波状紋が広がっている。9・10月に発生する秋型は前翅の突出が強く、前翅表に橙色部があります。裏面は枯葉状で、色調は多彩に変異があり、成虫で越冬する。



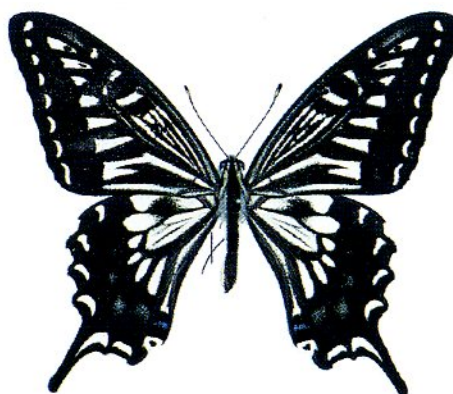
クロコノマチョウ 夏型 ♂表面 秋型 ♂表面
夏型 ♀裏面 秋型 ♀裏面

0 5 cm



ミヤマカラスアゲハ 春型 ♂ 表面
♀ 裏面

夏型 ♂ 表面
♀ 裏面



アゲハ 春型 ♂

夏型 ♂

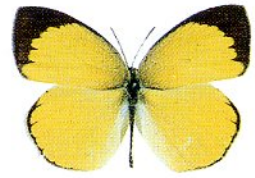
0 5 cm



モンシロチョウ 春型 ♂



夏型 ♂



ツマグロキチョウ

夏型 ♂

秋型 ♂



スジグロシロチョウ 春型 ♂



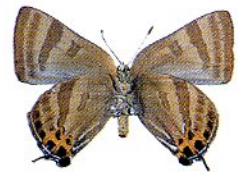
夏型 ♂



キタテハ 夏型 ♂



秋型 ♂



トラフシジミ

春型 ♂ 表面

夏型 ♂ 表面

春型 ♂ 裏面

夏型 ♂ 裏面



サカハチチョウ 春型 ♂



夏型 ♂



低温期型 (春) ♂



高温期型 (夏) ♂



低温期型 (秋) ♀

ペニシジミ



(7) 模様が「豹」に似たヒョウモンチョウの仲間

羽根の模様が豹に似ていることから、〇〇ヒョウモンと名付けられた蝶が、日本には14種分布し、多賀町からは8種が確認されている。ヒョウモンチョウの仲間の多くは暑くなると平地から山地へ避暑に行き（夏眠）、秋涼しくなると平地へ下りてきて産卵をする。

① ウラギンスジヒョウモン *Argyronome laodice*

② オオウラギンスジヒョウモン *Argyronome ruslana*

上の2種は、非常によく似ている為、間違えられることがよくある。

③ ミドリヒョウモン *Argynnis paphia*

多賀町に分布するヒョウモンチョウの仲間では、最もよく見られる種である。♀には茶色い型と緑色の強い型が見られる。

④ クモガタヒョウモン *Nephargynnis anadyomene*

ヒョウモンチョウの仲間では、最も早く発生する種で、5月中旬には姿を現わす。

⑤ メスグロヒョウモン *Damora sagana*

色も模様も♂と♀で異なり、初めて採集した人は、これが同種だとは思わないこともある。

⑥ ウラギンヒョウモン *Fabriciana adippe*

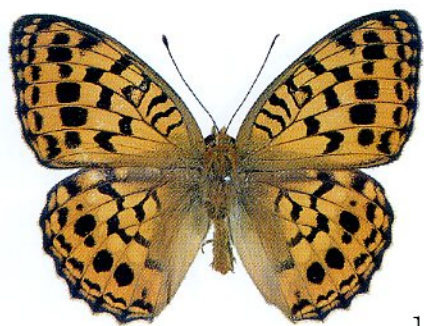
裏面に銀色の紋があることから、ウラギンヒョウモンと呼ばれている。山地に多く、平地ではあまり見られない。

⑦ オオウラギンヒョウモン *Fabriciana nerippe*

ウラギンヒョウモンによく似ている。以前は滋賀県の各地で記録されたが、最近では記録がない。絶滅の心配されている種。

⑧ ツマグロヒョウモン *Argyreus hyperbius*

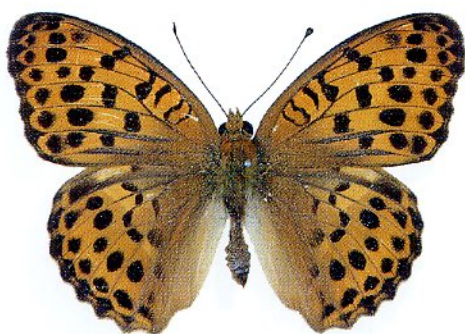
ヒョウモンチョウの仲間は、年1回発生が普通だが、南方系の種の傾向か、年に何度も発生を繰り返す。決まった越冬態はない。



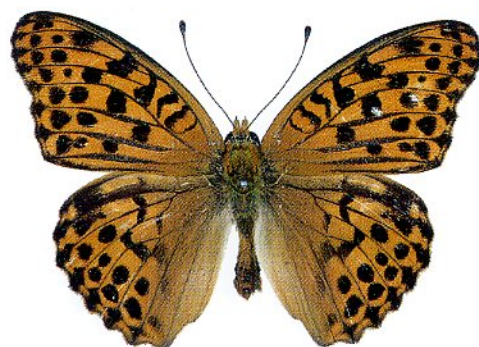
1



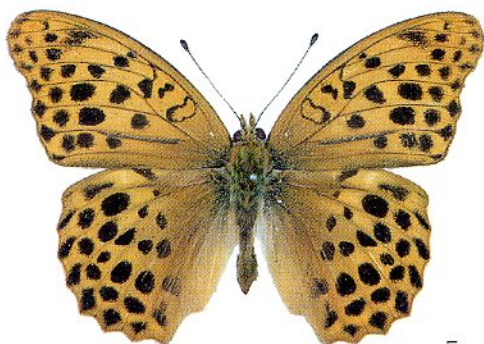
2



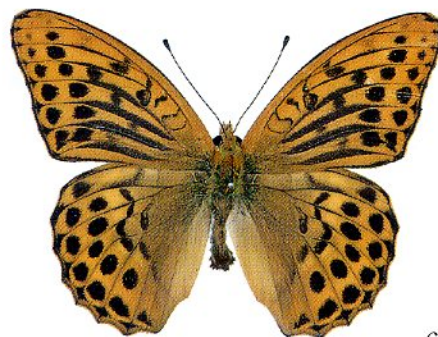
3



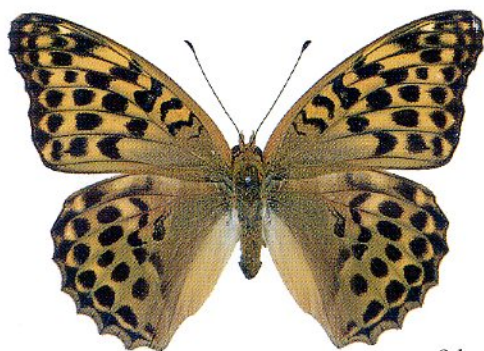
4



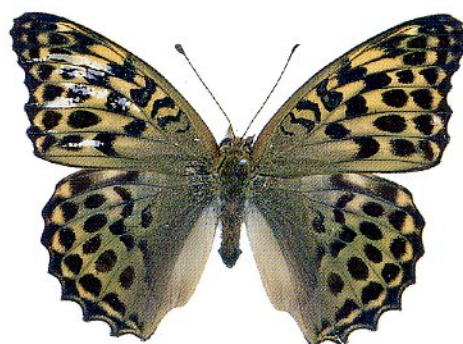
5



6 a

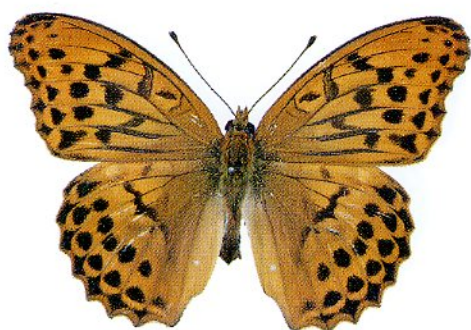


6 b

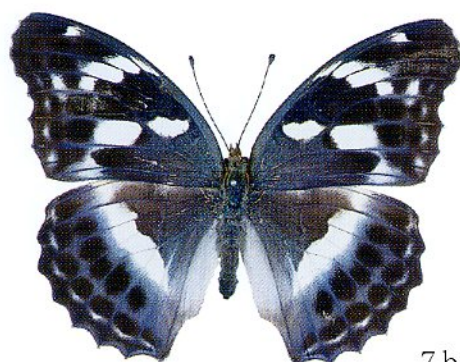


6 c

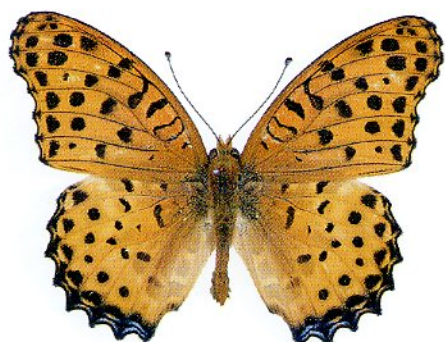




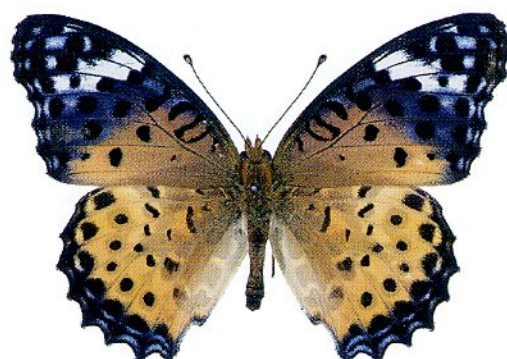
7a



7b



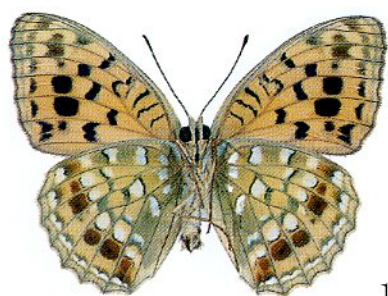
8a



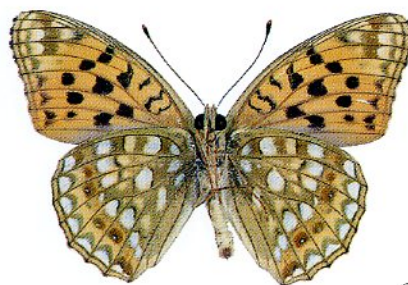
8b

ヒョウモンチョウの仲間 (表面)

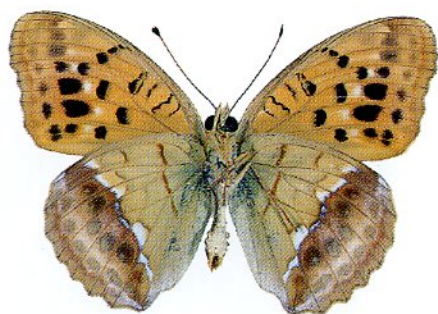
1. オオウラギンヒョウモン ♂
2. ウラギンヒョウモン ♂
3. ウラギンスジヒョウモン ♂
4. オオウラギンスジヒョウモン ♂
5. クモガタヒョウモン ♂
6. ミドリヒョウモン
 - a · ♂ b · ♀ (茶色型) c · ♀ (緑色型)
7. メスグロヒョウモン
 - a · ♂ b · ♀
8. ツマグロヒョウモン
 - a · ♂ b · ♀



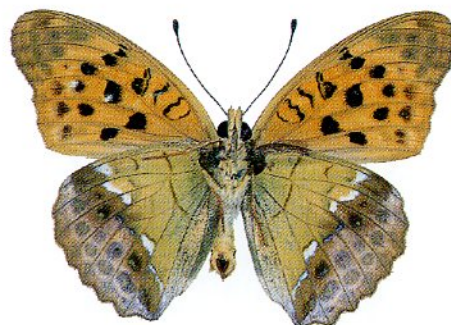
1



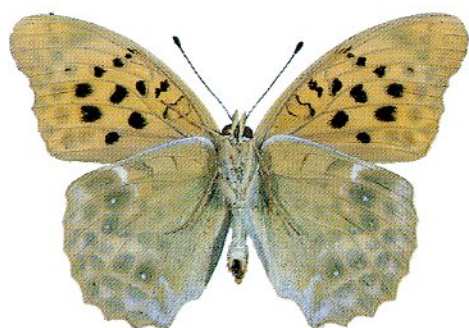
2



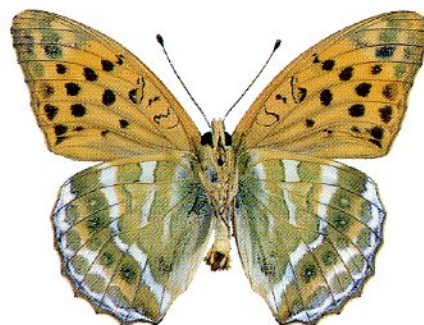
3



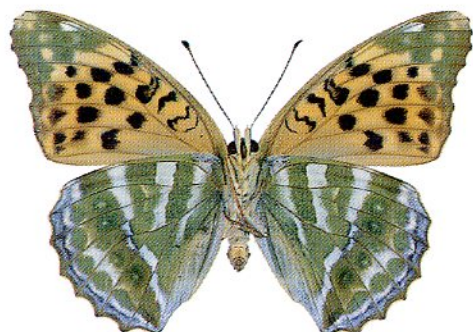
4



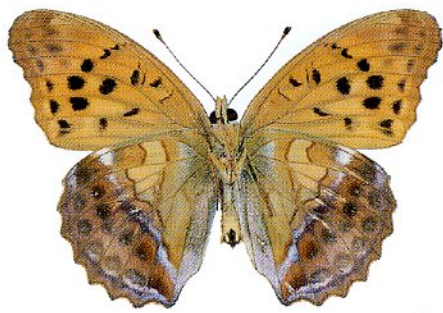
5



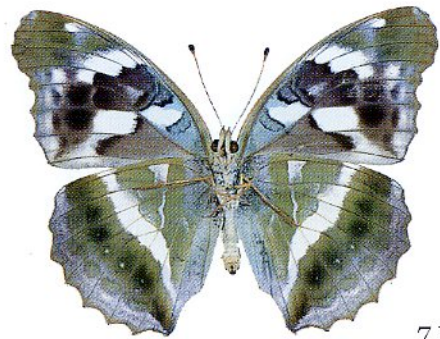
6 a



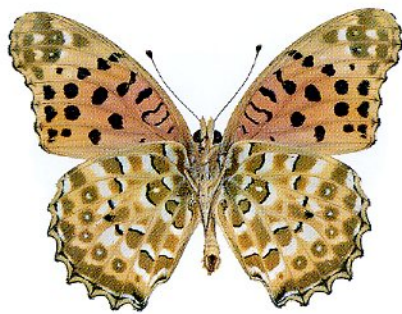
6 b



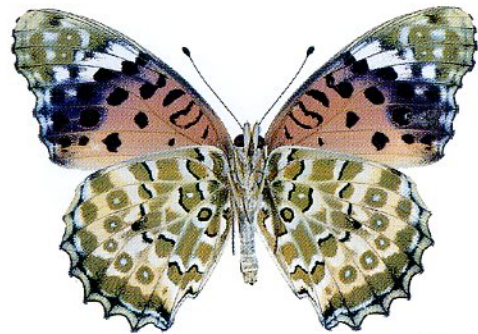
7a



7b



8a



8b

ヒョウモンチョウの仲間（裏面）

1. オオウラギンヒョウモン ♂
2. ウラギンヒョウモン ♂
3. ウラギンスジヒョウモン ♂
4. オオウラギンスジヒョウモン ♂
5. クモガタヒョウモン ♂
6. ミドリヒョウモン
a・♂ b・♀（茶色型）
7. メスグロヒョウモン
a・♂ b・♀
8. ツマグロヒョウモン
a・♂ b・♀

(8) 今後の再調査が必要と考えられる蝶

過去の文献や話題の中に出ている種の中に、迷蝶が記録された種・もう絶滅した種や話題だけだった種もあると考えられる。これを機会に再調査が必要と思う種をあげて見ることにした。

① キマダラルリツバメ *Spindasis takanonis*

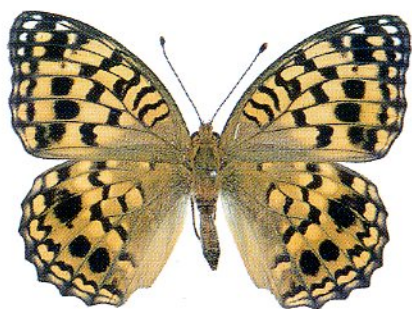
1950年代に故有川典生氏が後谷で幼虫・蛹・成虫を採集して以来、誰も確認していない。幼虫時にハリブトシリアゲアリと共棲する。成虫に2本の尾状突起がある種は、日本では本種だけで、本州だけに分布している。滋賀県では、大津市・志賀郡・甲賀郡・野洲郡・湖東町・八日市市・犬上郡に産地・記録地があるが、大津市以外では、非常に少ない。以前は湖東町・八日市市の愛知川流域は多産地として有名でシーズンには、採集者が全国から集まったが、近年は殆ど見られなくなってしまった。松・桜、桑の木で、ハリブトシリアゲアリが巣をつくっている古木の多い所を探すと発見しやすい。国外では中国・韓国に分布している。



↑

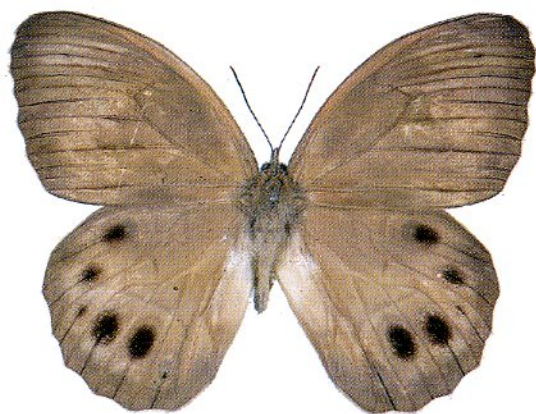


↑ 裏面



② オオウラギンヒョウモン *Fabriciana nerippe*

以前は、本州・四国・九州に分布し、以前の図鑑には「南西日本では平地～山地に棲息し、産地は局地であるが、個体数は少なくない」とある。滋賀県でも各地に分布した種で、多賀町も文献では分布地として発表されている。が現在は中国地方・九州を除いては激減し、絶滅したのではないかと云われている。滋賀県でもこの10年余採集されていない。食草はマスマレなど長葉のスマレ類である。国外では中国・韓国に分布している。



③ オオヒカゲ *Ninguta schrenckii*

北海道・本州に分布し、滋賀県では大津市の南部から八日市市にかけての鈴鹿山地の山麓にある湿地周辺から採集されている。多賀町では、萱原の犬上ダムで記録したという話を聞いている。環境条件から見ても採集できる可能性はあると思う。食草はカヤツリグサ科のカサスゲ・シラスゲ・オニスゲなどで、ススキで幼虫が採集されたこともある。国外ではロシア・中国・韓国にも分布している。

④ クジャクチョウ *Inachis io*

北海道・本州に分布し、1950年代には伊吹山で多く採集・目撃記録があり、図鑑でも滋賀県の伊吹山が分布の南西限とされてきた。しかし、近年は2例の目撃記録は聞いているが採集記録はない。多賀町では1954年に大浦氏（当時長浜小学校在学）が萱原（犬上ダム）で記録したことが、文献に発表されている。食草はカラハナソウ・ホソバイラクサ・オオバイラクサ・ムカゴイラクサ・ハルニレなど。国外ではヨーロッパからロシア・中国・韓国などユーラシア大陸に分布している。



※学名は「原色蝶類検索図鑑」猪又敏男著 を用いた。

2. 多賀町の蝶類目録と成虫の時期

和名	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備 考
アゲハチョウ科														
●ウスバシロチョウ														
●ギフチョウ														春の女神
●ジャコウアゲハ														
●アオスジアゲハ														
●キアゲハ														
●アゲハ														
●モンキアゲハ														
●クロアゲハ														
●オナガアゲハ														
●カラスアゲハ														
●ミヤマカラスアゲハ														
シロチョウ科														
●モンキチョウ														
●キチョウ														
●ツマグロキチョウ														近年は減少
●スジボソヤマキチョウ														
●モンシロチョウ														
●エゾスジグロシロチョウ														
●スジグロシロチョウ														
●ツマキチョウ														
マダラチョウ科														
●アサギマダラ														
タテハチョウ科														
●ウラギンスジヒョウモン														
●オオウラギンスジヒョウモン														
●ミドリヒョウモン														
●クモガタヒョウモン														
●メスグロヒョウモン														
●ウラギンヒョウモン														
●オオウラギンヒョウモン														絶滅かも

和名 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備 考
● ツマグロヒョウモン													
● イチモンジチョウ													
● アサマイチモンジ													
● コミスジ													
● ミスジチョウ													
● サカハチチョウ													
● キタテハ													
● ヒオドシチョウ													
● クジャクチョウ													記録
● ヒメアカタテハ													
● アカタテハ													
● ルリタテハ													
● スミナガシ													
● コムラサキ													
● ゴマダラチョウ													
● オオムラサキ													日本の国蝶
テングチョウ科													
● テングチョウ													
シジミチョウ科													
● ムラサキシジミ													
● ウラゴマダラシジミ													
● ウラキンシジミ													
● アカシジミ													減少
● ミズイロオナガシジミ													
● オナガシジミ													記録
● ウラクロシジミ													
● ウラミスジシジミ													記録
● ミドリシジミ													
● アイノミドリシジミ													減少
● ヒサマツミドリシジミ													減少
● キリシマミドリシジミ													減少

和名	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備 考
●フジミドリシジミ														減少
●オオミドリシジミ														減少
●エゾミドリシジミ														
●トラフシジミ														
●カラスシジミ														記録
●ミヤマカラスシジミ														稀
●コツバメ														
●キマダラルリツバメ														記録
●ベニシジミ														
●ゴイシシジミ														
●ウラナミシジミ														
●ヤマトシジミ														
●ルリシジミ														
●スギタニルリシジミ														極致的
●ツバメシジミ														
●ウラギンシジミ														
ジャノメチョウ科														
●ヒメウラナミジャノメ														
●ジャノメチョウ														
●ヒメキマダラヒカゲ														
●クロヒカゲ														
●ヒカゲチョウ														
●オオヒカゲ														記録
●コジャノメ														
●ヒメジャノメ														
●ヤマキマダラヒカゲ														
●サトキマダラヒカゲ														
●クロコノマチョウ														記録
セセリチョウ科														
●ミヤマセセリ														
●ダイミョウセセリ														

和名 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備 考
●アオバセセリ													
●ヒメキマダラセセリ													
●コチャバネセセリ													
●ホソバセセリ													
●キマダラセセリ													
●オオチャバネセセリ													
●ミヤマチャバネセセリ													
●チャバネセセリ													
●イチモンジセセリ													

科 名	多賀町	滋賀県
アゲハチョウ科	11種	14種
シロチョウ科	8種	8種
マダラチョウ科	1種	1種
タテハチョウ科	23種	31種
テングチョウ科	1種	1種
シジミチョウ科	28種	39種
ジャノメチョウ科	11種	15種
セセリチョウ科	11種	18種
計	94種	127種

1997年末現在、多賀町からは94種を（古い文献の中にヤマキチョウなどがあるが、誤同定と考えられるので除いた）確認している。これは滋賀県から確認されたチョウの74%にあたる。

アカタテハ・ヒメアカタテハ・キチョウ・ウラギンシジミなど成虫で越冬し、冬季でも暖かい日には姿を見せる種もあるが、チョウの種類・個体数が多いのは4月から10月で、特に4月から7月が観察には最も適している。7月末から8月は暑さを避けて山地へ移動する種もあり、平地では種類・個体数ともに少なくなり観察には適していない。9・10月になるとヒョウモンチョウ類も平地に返って来、成虫で越冬する種や移動中のアサギマダラも姿を見せるため一時的に種類・個体数が増える。

3. 調査結果をまとめて思う

多賀町のチョウ類分布調査は、筆者自身も50年余になり先人の調査報告を入れると60年を超えると思う。しかし、広い山地にも恵まれた多賀町のすみずみまで、すべての季節を通して完全にチョウのすべてが解明出来たとは考えられない。1996年7月12日には土田典子氏（多賀町博物館建設準備、昆虫調査担当）が滋賀県未記録のカラスシジミを記録（蝶研ワールドVol.11 12…1996年12月筆者発表）している。隣接県・市町村の文献等から今後記録出来る可能性が考えられる種をあげると、

- シータテハ

彦根市でも記録があり、春先には越冬後の成虫の見られることがよくある。

- イシガケチョウ

近年北上を続けている種で、鈴鹿山地でも霊仙山麓（坂田郡）・永源寺町から記録されている。

- ウラナミアカシジミ

以前は湖東町・愛知川町・八日市市の愛知川兩岸の林では極普通種だった。その他、彦根市を始め県内に広く分布していたが、不思議と多賀町からは記録がなかった。現在は、県内各地とも姿が見られなくなり滋賀県では幻に近くなっている。クヌギ林から記録できる可能性はあると思う。

- ウスイロオナガシジミ

比良山地が有名だが、伊吹山地、山麓・湖東町の愛知川堤の林からも採集・記録されている。個体数の多い種ではないが、ミズナラ・ナラガシワ・クヌギ・コナラ林で記録できる可能性はあると思う。

- メスアカミドリシジミ

比良山地・伊吹山地には分布しているが鈴鹿山地からは未記録である。伊吹山には分布しているので、キンキマメザクラ・ヤマザクラの多い山地から記録できる可能性があり多賀町では霊仙山は有望だと思う。

- ジョウザンミドリシジミ

前種同様比良・伊吹山地には分布しているが鈴鹿山地からは未記録である。ミズナラの多い山地で記録できる可能性はあると思う。

- クロシジミ

オオクロアリと共棲する種で大津市周辺に産地が多いが、愛東町・永源寺町にも分布している。オオクロアリのいるクヌギ林で記録できる可能性はあると思う。

- ウラナミジャノメ

あまりめだたない種で個体数も多くはないが、八日市市にも記録がある。ヒメウラナミジャノメに似ているが注意して調査をすれば、記録できる可能性はあると思う。

- キバネセセリ

県内では伊吹山地でだけ分布が確認されている種だが、食樹のハリギリは多く見られるし、霊仙山（山東町）で目撃したという話しも聞いている。

などがあげられる。これらは食樹・食草・近隣の分布からの可能性であって、絶対に分布しているとは言い切れないし、カラスシジミのように予想もしていなかった種や台風などに運ばれてきた迷蝶が記録される場合もあると思う。

既に確認をしている記録だけの種についても、迷蝶か、迷蝶が一時発生しただけか、発生はしているが極端に個体数が少ないための調査不足かなど発生状況を食草、環境等の面からも検討する必要があると思う。オオウラギンヒョウモン（草原生）のように各地に普通に分布していたが何かの理由で今は全国的に絶滅傾向が見られ、一部の地域にしか残っていない種については、既に絶滅したのかどこかに細々と発生を繰り返しているかの確認も必要だと思う。減少傾向の見られる種については、食草（樹）・成虫の訪花植物・生活環境の保護が必要だと思う。

環境の変化は生態系を乱し、特に開発はそこに分布する全生物を滅ぼしかねないので十分な配慮が大切だと考えている。

あ　と　が　き

多賀町の蝶類は県記録の74%、だが県記録の中には迷蝶・伊吹山地が南限になっている種・大津付近まで北上して来た種も含まれ、それらを除けば80%は分布していたと考えられる。しかし、多賀町は自然豊かな恵まれた町と喜んでよいのだろうか。

1970年代は春先に四手・大岡の山道を歩くとギフチョウか何処からともなく愛らしい姿を見せ疲れを忘れさせてくれた。だが最近は雑木林は何時の間にか杉林に変わり、林内に群落をつくっていた食草カンアオイは探すのにも一苦労するようになりギフチョウの姿も殆ど見られなくなってしまった。ミズナラ・クヌギ・アカガシ・イヌブナが多く見られた山地も林道の発達に伴って手の付けられる場所は杉山に変わってしまった。木々の豊富だった山も1年後には土を削られ山が姿を消してしまった所もある。自然が変化するに従って蝶も少なくなっている事実もしっかり見つめる必要があると思う。町づくりをすすめる上での開発は必要だが、「自然との共存」を大切にした開発が望まれる。

後になったが、調査にあたり、土田典子（多賀町教育委員会臨時調査員）氏・写真撮影をお願いした大八木和久（多賀町教育委員会文化施設建設準備室臨時調査員）氏をはじめご協力いただいた多くの方々に紙上から感謝いたします。

1998年3月

布 藤 美 之

多賀町文化財・自然誌調査報告書 第5集

1998・3

編集・発行 多賀町教育委員会
滋賀県犬上郡多賀町多賀324
TEL.0749-48-0240

印刷・製本 サンライズ印刷株式会社
滋賀県彦根市鳥居本町655-1
TEL.0749-22-0627

例 言

1. 本報告書は、平成4年度から実施してきた昆虫（チョウ）調査の成果をまとめたものである。
2. 本調査は、多賀町教育委員会と文化財・自然誌調査員（昆虫担当）の布藤美之で実施した。
3. 執筆は布藤美之が行った。
4. 本書のとりまとめ、編集は多賀町教育委員会で行い布藤美之が担当した。
5. 写真撮影は、大八木和久（多賀町教育委員会資料調査員）が行った。

目 次

序

例言・目次

はじめに

- | | |
|-------------------------|----|
| 1. 多賀町の蝶数題..... | 3 |
| 2. 多賀町の蝶類目録と成虫の時期 | 23 |
| 3. 調査結果をまとめて思う | 27 |

あとがき